

ひきこもりの心理特性と精神的自立との関連性

— 高校生の意識調査結果の分析から —

山 本 健 治

〔抄 録〕

本研究では、青年期の精神的自立の課題について、職業観や勤労観、また親子関係を含む対人関係との関連から考察を試みた。方法としては、高校生を対象にこれらのことに関する意識調査を実施し、その結果について分析した。同時に「ひきこもりの心理特性」を測る調査を実施し、抽出されたそれぞれの因子と前述の職業観・勤労観及び対人関係との関係を回帰分析等を用いて精査した。

その結果、ひきこもりの心理特性を持つ者は、学業から職業への移行について、さまざまな不安を抱えていることが明らかになった。対人関係においても、信頼できる人や、困ったことを相談できる人の存在に乏しく、信頼感に基づいた一体感を感じられないでいることがわかった。それらの要因を探るなかで、生来の個性とは別に、幼児期、児童期から連続する発達課題の問題として、この問題を捉え直すことが重要である。

キーワード 精神的自立、ひきこもり、心理特性、職業観、対人関係

I 問題と目的

今、青年のフリーター志向の広がりやニート（無業者）の増加、また、就職しても早期に離職してしまうなど、学校から職業への移行にかかる課題は深刻になってきている。本来、青年にとって進路や職業の選択は人生にとって大切な通過点である。また、人の生き方というのは、自分だけの問題ではなく、自分を取り巻く周囲の条件とも関わりがある。このことは、単に学校を卒業する青年の問題であるとするのではなく、青年を取り巻く社会の問題として捉えなければならない。同時に、児童期や青年期前期から身につけるべき職業観や勤労観といったことと切り離して考えるわけにもいかない。

2005年度、N県では県立教育研究所を中心に『N県キャリア教育研究委員会』（委員長東山弘子佛教大学教授）を立ち上げ、学校や家庭・地域社会が取り組むべきキャリア教育の在り方について研究を進めた。*（注）

その結果、学校や家庭・地域社会は一体となって、子どもたちに生き方を選択するための望ましい学習環境づくりを提供する必要があるということが明確になった。今日的な教育課題として、乳幼児期における情動教育の重視、学齢期以降の発達段階に応じたキャリア教育の充実、また新しい家庭像の創造などいくつかの課題も提言することができた。

同時に、調査結果からは青年期の精神的自立の遅れがキーワードとして浮かび上がってきた。このことは今日の親子関係の在り方が関係していると容易に予想されるが、単にそのことだけが関係しているとは考えにくい。親子関係の在り方だけではなく、広く対人関係の在り方の変化と関係しているのではないかということである。森(2005)はフリーターやニートをめぐる臨床について「対人関係に苦手意識を持ち、自己愛が傷つくことを恐れて、社会的場面から逃避する若者の姿の存在」を指摘している。このことはひきこもりの状態像と酷似している。

今回の研究では上記の意識調査結果の分析に加えて、高校生に対して職業観・勤労観及び親子関係を含む対人関係に関する意識調査(以下、「職業観・勤労観及び対人関係に関する意識調査」と記す。)と「ひきこもりの心理特性」を測る調査を実施した。

本論文の目的は、青年の内、特に高校生に焦点を当て、対人関係が苦手になりつつあると言われる昨今の青年の心理特性、とりわけ「ひきこもりの心理特性」と精神的自立との関連性について検討・分析することにある。

Ⅱ 方法

(1) 調査対象者及び調査期間

N県内公立高校生340名を対象に、「職業観・勤労観及び対人関係に関する意識調査」と「ひきこもりの心理特性」を測る調査を実施した。いずれも無記名自記式の調査とした。調査時期は2005年9月から10月である。

(2) 調査項目の選定

調査項目の選定については、2004年7月にN県立教育研究所が実施した「キャリア教育(勤労観・職業観)」についての意識調査及び内閣府等の調査を参考に、N県キャリア教育研究委員会でさまざまな視点から検討して決定した。

(3) 方法

本研究では、高校生を対象として、職業観・勤労観及び親子関係を含む対人関係と「ひきこもりの心理特性」との間になんらかの関連性があるのではないかという仮説の検証を行いたいと考えた。その結果をもとに青年期の精神的自立について考察をする。

最初に、ひきこもりの心理特性を測る項目について因子分析を行う。次に因子が特定できた場合、その各因子と「職業観・勤労観及び対人関係に関する意識調査」の各質問項目との関連をみるためにロジスティック回帰分析もしくは重回帰分析を繰り返し分析を進める。なお、必

要に応じて「職業観・勤労観及び対人関係に関する意識調査」の単純集計結果の中から本研究に関連する結果については考察を加える。(統計処理ソフトSPSSを使用)

Ⅲ 結果と考察

1 結果

(1) 因子分析結果

ひきこもりの心理特性を測る24項目の平均値、標準偏差を算出し、いわゆる天井効果及びフロア効果の見られた7項目については分析から除外した。その後、残った17項目に対する回答に基づいて因子分析(主因子法・Varimax回転)を行った。固有値のプロットを参考にしながら2～5因子解でそれぞれ試みた。その結果、解釈可能な次の3因子が抽出された。

表1 ひきこもり傾向心理特性尺度の因子分析結果 (Varimax 回転後の因子行列)

| | | I | II | III | 共通性 |
|------|-------------------------|-------|-------|-------|-------|
| 1-19 | 落ち込みやすいほうです。 | .78 | .05 | .17 | .64 |
| 1-3 | 傷つきやすいほうです。 | .70 | .02 | .24 | .54 |
| 1-20 | 不安になりやすいほうです。 | .66 | .17 | .27 | .53 |
| 1-2 | 何事も気にするほうです。 | .57 | .14 | .26 | .42 |
| 1-13 | 精神的にゆとりをもてないことが多いです。 | .53 | .25 | .20 | .38 |
| 1-8 | イライラすることが多いです。 | .42 | .27 | .22 | .29 |
| 1-6 | 人と一緒にいるのが苦手です。 | .06 | .75 | -.03 | .56 |
| 1-16 | 人間関係が苦手です。 | .26 | .68 | .15 | .55 |
| 1-9 | 自分を表現するほうではありません。 | .06 | .59 | .14 | .37 |
| 1-1 | 内向的です。 | .07 | .55 | .16 | .33 |
| 1-11 | 外の世界よりも自分の世界にいるほうが好きです。 | .03 | .53 | .07 | .29 |
| 1-17 | 消えてしまいたくなくなることがあります。 | .37 | .44 | .01 | .33 |
| 1-5 | 本当の自分を知られたくないと思っています。 | .22 | .42 | .20 | .27 |
| 1-14 | 人の目が気になります。 | .29 | .17 | .84 | .82 |
| 1-4 | 世間体を気にするほうです。 | .24 | .12 | .57 | .40 |
| 1-22 | 自分のスタイルや外見が気になります。 | .33 | .05 | .51 | .37 |
| 1-15 | 人から笑われるのではないかと心配です。 | .22 | .38 | .49 | .43 |
| 因子寄与 | | 2.88 | 2.69 | 1.96 | 7.53 |
| 寄与率 | | 16.93 | 15.84 | 11.54 | 44.32 |

(2) 尺度としての因子構造

第1因子は「落ち込みやすいほうです」「傷つきやすいほうです」「何事も気にするほうです」等の項目から神経症的な要素が多いので『神経症的傾向』因子、第2因子は「人と一緒にいるのが苦手です」「自分を表現するほうではありません」等の項目から、『内向的傾向』因子、第3因子は「人の目が気になります」「人から笑われるのではないかと心配です」等の項目から、対人不安の要素が強い傾向にあるので、『対人不安傾向』因子と命名した。

(3) 信頼性の検討

17項目の因子間の内的整合性を調べるために、Cronbachの α 信頼性係数を算出したところ第1因子から第3因子まで、.81.77.73であり、ある程度の信頼性は認められた。

2 回帰分析及び単純集計結果の分析と考察

抽出できた各因子と、対象者の職業観・勤労観及び対人関係に関する考え方との関係性について、その可能性をロジスティック回帰分析等を用いて探索的に検定を行った。以下に有意差のあった項目を示しながら考察を加える。同時に、関連する単純集計結果についても分析・考察する。

(1) 勤労観や職業観について

① 職業選択の理由はなにか。

表2 職業選択理由と各因子とのロジスティック回帰分析結果

| 選択肢 | 因子 | 標準偏回帰係数 | Nagelkerke R ² 乗 |
|-----------|----------------|-----------|-----------------------------|
| 収入が安定している | 対人不安傾向 (n=175) | -0.353 * | 0.035 |
| 収入が多い | 対人不安傾向 (n=115) | -0.377 * | 0.047 |
| 親の勧め | 対人不安傾向 (n=11) | -0.98 * | 0.091 |
| なんとなく | 神経症的傾向 (n=16) | -1.078 ** | 0.162 |

(* p<.05 ** p<.01)

単純集計結果では、職業選択理由として「自分の能力や性格にあってること」「収入が安定していること」「将来性があること」が重要であると答えている。しかし、表2の結果のように負の標準偏回帰係数が有意であったことから、対象者のうち対人不安傾向にある者は職業選択理由にある「収入の安定」「収入の多さ」「親の勧め」に対して否定的であることがわかった。神経症的傾向の者は「なんとなく」職業を選択するということが少ないといえる。

対人不安傾向にある者は、仕事に就き収入を得る以前の問題として、社会に出て職に就くということ自体に漠然とした抵抗や不安があるのではないか。神経症的傾向のある者では、職業選択に対しても石橋を叩いて渡るがごとく慎重な姿勢が窺える。

② 将来どのような形で働きたいか。

表3 将来働きたい形と各因子とのロジスティック回帰分析結果

| 選択肢 | 因子 | 標準偏回帰係数 | Nagelkerke R ² 乗 |
|-----------|--------------|-----------|-----------------------------|
| ボランティアとして | 対人不安傾向 (n=4) | 1.235 * | 0.142 |
| 働きたくない | 内向的傾向 (n=6) | -1.932 ** | 0.308 |

(* p<.05 ** p<.01)

③ フリーターという生き方についてどう思うか

表4 フリーターの捉え方と各因子とのロジスティック回帰分析結果

| 選択肢 | 因子 | 標準偏回帰係数 | Nagelkerke R ² 乗 |
|----------|----------------|-----------|-----------------------------|
| 新しい生き方だ | 対人不安傾向 (n=21) | 0.567 * | 0.055 |
| しないほうがいい | 神経症的傾向 (n=49) | 0.352 * | 0.088 |
| しないほうがいい | 対人不安傾向 (n=216) | -0.649 ** | 0.088 |

(* p<.05 ** p<.01)

単純集計結果によると、「将来どのような形で働きたいですか」という問いに対して、対象者では56.4%が安定した正規採用を望んでいることがわかった。職人や自営業といった「腕に職をつけて会社に頼らずに働きたい」と答えた者29.1%を加えると、実に85.5%が職業に対して安定志向であったり、積極的であるといえる。フリーターという生き方についてもニートに対する考え方と同様に肯定的にとらえておらず、「できるだけ早い時期に正社員に移行すべき」という考え方が大勢を占めていた。これは、「フリーターという生き方をどう思うか」という問いに対して、対象者全体としては「望ましくない」が15.4%、「早く正社員に移行すべき」が64.5%を占め、フリーターという生き方に対して否定的であるということを示している。しかし、表3からは、対人不安傾向にある者は、ボランティアで働くことに対しては肯定的であることがわかる。次に、表4からわかるように対人不安傾向にある者はフリーターを「新しい生き方だ」と肯定的に捉えているのがわかる。これは、彼らの職業選択の理由で「収入の安定」や「収入の多さ」にこだわらない、むしろ職に就くこと自体に不安があるのではないかと分析したが、契約関係にない自由度の高いボランティア活動なら参加しやすいということだろうか。フリーターを新しい生き方だと捉える新鮮な感覚も、従前から社会が公然と認めてきた職業観、勤労観に束縛されることへのささやかな抵抗と理解していいのかもしれない。

神経症的傾向にある者では逆にフリーターという生き方に対して否定的であることがわかった。これは、将来が保障されないかもしれない曖昧な雇用形態に対する不安の表れではないかと考える。

次に、表3からは、内向的傾向の者も、決して「働きたくない」と思っているわけではないということが読み取れる。選択肢に「アルバイトやパートで働きたい」「正式に雇われて働きたい」や「ボランティアで働きたい」などがあったが、それらの選択肢を積極的に選ぶわけではなかったが、決して「働くこと」そのものに対して否定的ではないということであろう。これはむしろ内向的傾向にある者は、「自分の思うようにやる」「自分の好きなようにやる」といったことに自信がないことの裏返しではないだろうか。

以上のことから、職業に対する考え方一つをとってみても、当然ではあるが個々人の性格傾向により違いがあることがわかった。とりわけ、ひきこもりの心理特性を表す「神経症的傾向」「内向的傾向」「対人不安傾向」の各因子から眺めると、学業から職業生活に移行すること自体

に対する漠然とした不安があったり、職業選択に慎重になりすぎて逆に不安に陥ったり、自分に自信がなく職業選択の前で立ち止まってしまうようなことが起こっている可能性はある。

対象者全体の調査結果を概観したとき、多くの者に健康的な職業観、勤労観が育っているように感じ取れたが、個々の性格特性から見ると、様々な課題を背負った者の存在も明らかになった。

今後、このような対象者一人一人のキャリア発達を支援するためにも、学校は保護者、地域と十分連携を図りながら、きめ細やかなキャリア教育を組織的、計画的に展開していく必要があると思われる。そして個々の性格特性を生かしながら、それぞれのふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てていく必要があるのではないかと考える。

(2) 親子関係を含む対人関係について

家族関係、とりわけ親子関係がかつてのそれと随分様変わりしたといわれている。「職業観・勤労観及び対人関係に関する意識調査」には、親子関係を含む対人関係について問う質問項目が含まれていた。「あなたは普段、家族と会話をするか」という問いに対しては、対象者では「よくする」「まあまあする」と答えたものを合わせると84.5%にも達し、家族との会話の多さが伺えた。また、「働くことや仕事について話をしたことがあるか」という問いでも、「よくある」「まあまあある」を合わせると56.1%を占めた。話した内容では「将来の仕事について」が78.2%と最も多かったが、「働くことの意義について」も17.0%の対象者が話題として選んでいた。このことから、対象者にとって職業選択など将来設計に関しては、経験者である保護者が十分相談者と成り得ているといえる。

次に、「親と遊んだ記憶があるか」との問いに対して「ある」と答えた者が実に80%に達した。内容としてはスポーツや屋外遊びをしたことを挙げている者が多かった。これは今回の対象者である高校生に限ったことではなく小学生や中学生、大学生にも共通しているのではないかとと思われる。なかでもとりわけ、親とキャッチボールをしたことが強く印象に残っていることが自由記述欄からわかった。キャッチボール自体は単純な遊びではあるが、互いの心を通わす、まさに心のキャッチボールとなったのかもしれない。このことからわかることは、日々の何気ないわずかな時間の中にも大人が子どもと心を通わす機会があるということである。

表5からは少し気になる結果が読みとれる。それは内向的傾向にある者では、親と遊んだ記憶の有無を問う項目で負の標準偏回帰係数が有意であり、これは親と遊んだ記憶が乏しいとも解釈できるということだ。

「あなたは家族(親)から信頼されていると思いますか」という問いに対しても、対象者全体としては「すごく信頼されている」11.0%、「まあまあ信頼されている」61.5%と高率を示しながらも、表6からわかるように、内向的傾向にある者は男女共、家族から信頼されているという意識が薄いのではないかと推察される。

表5 親と遊んだ記憶と各因子とのロジスティック回帰分析結果

| 選択肢 | 因子 | 標準偏回帰係数 | Nagelkerke R2乗 |
|-----|---------------|----------|----------------|
| ある | 内向的傾向 (n=257) | -0.498 * | 0.047 |

(* p<.05 ** p<.01)

表6 家族からの信頼の有無と各因子との回帰分析結果

| | 男子 | 女子 |
|-------|----------|----------|
| 因子 | 標準偏回帰係数 | 標準偏回帰係数 |
| 内向的傾向 | -0.189 * | -0.169 * |

(* p<.05 ** p<.01)

親子関係についての別の質問項目である、「今までで親にして欲しかったことは何か」という問いに対しては、対象者では「一家団欒」や「もっと遊んで欲しかった」という答えが全体の約50%を占めた。このことから、もっと一緒にいて、もっと遊び、もっと関わってもらいたかったという子どもたちの心の叫びのようなものを感じる。

以上のことと、内向的傾向にある者が親との遊んだ記憶に乏しく、また親からあまり信頼されていないと感じている実態を鑑みたとき、内向的傾向にある子どもたちに対しては、幼少期から積極的に心を通わす遊びを大人の側、親の側から展開していくことが重要であると考えられる。

次に、家族との関係の他に、教員、友人、相談相手を含め友人との関係について聞いた結果について考察してみる。

「信頼できる先生はいますか」という問いに対しては、約50%の者が「いる」と答えている。具体的に信頼できる先生の内訳では「学級担任」が44.1%、次いで「クラブ顧問」が29.7%と高く、両方合わせると73.8%にも及ぶ。次に、友人関係について、「仲の良い友人はいますか」という問いでは、実に約98%が「いる」と答えた。「今、困ったことを相談できる人はいますか」という問いに対しても、約85%という高率で「いる」と答えていた。特に対象者の多くが、困った時に相談できる人がいると答えたこの結果には、少し安心させられるものがある。しかしながら、以下の表7から表9を見ると、ここでも内向的な傾向にある者については負の標準偏回帰係数が有意となっており、対人関係不全ともいえるべき憂慮すべき内容がある。具体的には信頼できる先生や仲の良い友人、困ったことを相談できる人の存在がいずれも薄いということだ。

表7 信頼できる先生の有無と各因子とのロジスティック回帰分析結果

| 選択肢 | 因子 | 標準偏回帰係数 | Nagelkerke R2乗 |
|-----|---------------|----------|----------------|
| いる | 内向的傾向 (n=155) | -0.385 * | 0.04 |

(* p<.05 ** p<.01)

表 8 仲の良い友だちの有無と各因子とのロジスティック回帰分析結果

| 選択肢 | 因子 | 標準偏回帰係数 | Nagelkerke R ² 乗 |
|-----|---------------|-----------|-----------------------------|
| いる | 内向的傾向 (n=320) | -2.208 ** | 0.377 |

(* p<.05 ** p<.01)

表 9 相談相手の有無と各因子とのロジスティック回帰分析結果

| 選択肢 | 因子 | 標準偏回帰係数 | Nagelkerke R ² 乗 |
|-----|---------------|-----------|-----------------------------|
| いる | 内向的傾向 (n=273) | -0.775 ** | 0.117 |

(* p<.05 ** p<.01)

内向的傾向にある者は、親と一緒に遊んだという記憶も少なく、また親からあまり信頼されていないと感じていることについてはすでに述べてきたが、それは親との関係だけに留まらないということである。仲の良い友人も少なく、また困ったことを相談できる相手の存在も怪しい。信頼されていないということ、それは目の前の相手との一体感が乏しいことを意味する。親を心の拠り所とも言える「基地」と位置づけることができず、また信頼感に基づいた一体感を持ってないでいることが、このような結果を導いたのではないか。内向的傾向にある者に対しては今後、なお一層、細やかな配慮が必要だといえよう。

IV 総合的考察及び今後の課題

以上、今回の研究では対象者である高校生の勤労観・職業観と対人関係の二つの側面に焦点を当て、ひきこもりの心理特性との関連を探ってきた。そしてそのことから、青年期の精神的自立をどう援助するかを考えてきた。

精神的自立について、深谷（2000）は「当面した問題を自分で決められる能力『自己決定能力』が備わった状態を指す」と述べている。しかしながら、この自己決定はただ単に自分勝手に物事を決めるということではない。おかれた状況を総合的に把握し判断した上で行う高度な自己決定を指すと思われる。今回の調査では、調査に協力してくれた対象者の大半が健康的な職業観、勤労観を持っていることがわかった。しかしながら、ひきこもりの心理特性と関連させて詳細を眺めたとき、少数派ではあったが職業や勤労に対してさまざまな不安を抱える者の存在を確認することができた。精神的自立という観点からこの事実を見たとき、これらの対象者にいかに高度な自己決定能力を育むのかという課題が見えてきた。それは、将来、職業へ移行していくまでの間に、多岐にわたる分野から情報収集をしながら、同時に、その中から自分にとって必要な情報のみを選択し、自己決定へと導くというプロセスを歩む必要があるということである。しかし、このことは対象者本人だけに任せて解決できることではないのではないか。

冒頭でも触れたように、今日、青年のフリーター志向の広がりやニート（無業者）の増加、

早期離職など、学校から職業への移行が以前に比べて困難になってきている。しかしながら、これらの問題を青年本人やその家族だけのせいにするのは結論を急ぎ過ぎている。また、子どもたちが生き方を選択していくとき、中学校以降における従前からの進路指導だけに頼ることはあまりにも無謀すぎるのではないか。これからは小学校段階から働くことや生きることへの意欲や自立心を持たせ、将来社会人や職業人となるための基礎的・基本的な資質や能力を身につけさせる必要があると思われる。中でも、いわゆるアイデンティティの確立が課題となる青年期前期・中期にあたる中学生、高校生に対しては、学校の『ガイダンス機能』を充実させ、個々の対象者の性格特性をも十分考慮しながら、適応や選択に関わる指導・援助を当たらねばなるまい。

次に、親子関係を含む対人関係についてであるが、こちらも今回の調査では、調査に協力してくれた対象者の大半が良好な関係を保っていることがわかった。しかし、ひきこもりの心理特性と関連させて詳細を眺めたとき、憂慮すべき事実が浮かび上がった。

ひきこもりの心理特性を持つ子どもたちは、もちろん生まれながらの個性との関連も否定できないが、それ以上に育ちの中で、また環境の中でそうならざるを得なかったところがあるのではないか。乳幼児期から学童期にかけて、基本的な安心感や信頼感を獲得できなかった子どもたちが、本稿で扱ったようなひきこもりの心理特性を持ち合わせても不思議ではない。今回の調査対象者はひきこもりの状態にない。しかし、ひきこもりではないが、調査結果から神経症的であったり内向的であったり、また対人不安を感じていることから対人関係に苦手意識をもっている一部の者の存在を確認した。彼らの多くは自分に自信がなく、ややもすると劣等感を抱き、集団に所属することに対して抵抗があるのかもしれない。また、不安感を強めているのかもしれない。このことを単に性格の問題として片づけるのではなく、彼らを社会的適応へと導くための対人関係スキルを身につけることも考えていかねばならない。

昨今、自立が青年期のテーマとなること多い。このことは、逆に自立がスムーズに進んでいない青年が増えてきたのではないかと憂いはじめた結果ではないかと思う。榎本(2006)は「青年期になったからといって昨日まで親に依存していた者が突然自立できるわけではない。幼児期や児童期を通して自立に向けて徐々に力をつけていくものであって、そうしたプロセスを経てはじめて青年期の自立が順調に進む。」と述べている。また、自立できない青年の増加が深刻な社会問題になっていることの背景に、「親の保護下にどっぷり浸かっている児童期から、親の保護下にありながら自分の世界を持ち始め自立への動きを見せ始める児童期へ、さらに自分独自の世界に浸ったり反抗したりしながら試行錯誤に没頭する青年期へという移行が順調に進行しないという現代的な事情がある。」と述べている。すなわちErikson, E. H.が発達課題の中で指摘する、幼児期の自律性や自主性の獲得、また児童期の勤勉性の獲得の上に立って青年期の自立があるのだが、それがうまくいっていないという指摘である。幼児期においては自己中心的な言動もいくらかは許容されるものの、児童期に入り集団生活を余儀なくされると、次第

に人と関わる技術すなわち社会的スキルを身につけなければならない。しかしそれは一方的に自分の欲求や行動を抑制することだけではなく、他に認められるような自己主張ができるようになることであり、また人に対して上手に依存することができるということでもある。

最後に、対人関係が苦手になりつつあると指摘される今日の青年についていうならば、そのことだけに注目していても解決策はでてこない。青年期以降の自立に向けての準備は、幼児期からすでに始まっていると考えるべきではないか。あらためて青年の自立を阻害する親子関係のみならず、ひいては社会構造のあらゆる歪みに目を向け、まず何を修正すべきかを十分検討していくことが、これらの問題の解決への糸口になるのではないかと考える。

〔注〕

* 研究の基礎データとしてN県内公立小、中、高校生及び私立大学生（大学院生を含むを）、教員、保護者と社会人を対象に、「生活・学習・仕事」に関する意識調査を実施した。

〔引用・参考文献〕

榎本博明（2006）自立心の心理学、児童心理No846 2-10 金子書房

神谷ゆかり（2002）特性概念としての精神的自立に関する実証的研究 風間書房

玄田有史・曲沼美恵（2004）ニートフリーターでもなく失業者でもなく― 幻冬舎

小杉礼子（2005）フリーターとニート 勁草書房

東山弘子（2006）キャリア教育の課題、[キャリア教育とニート抑止] 奈良県キャリア教育研究委員会編 1-24

福島朋子（1993）自立に関する概念的考察 発達科学研究Vol9 73-85

二神能基（2005）希望のニート 東洋経済新報社

森 陽子（2005）フリーター、ニートをめぐる臨床から、[迷走する若者のアイデンティティ]（編者白井利明）70-105 ゆまに書房

山本健治（2007）若者の精神的自立を考える、[教育は生きている] 奈良県教育課題研究委員会編 79-87

〔参考資料〕

「職業観・勤労観及び対人関係について」の意識調査の内、今回「ひきこもりの心理特性」との関連性を見た質問項目の抜粋を掲載する。(仕事・親子関係・学校・友人関係・社会についての質問項目全27問中8問を抽出)

問2：あなたは、将来、どのような理由で仕事を選びますか。(複数回答可)

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1 安定した大きな企業であること | 2 収入が安定していること |
| 3 将来性があること | 4 社会に役立つこと |
| 5 自分の考えやアイデアを発揮できること | 6 自分の能力や性格にあっていること |
| 7 収入が多いこと | 8 人に使われないこと |
| 9 時間にしばられないこと | 10 親のすすめ |
| 11 家の仕事を継ぐ | 12 なんとなく |
| 13 その他 () | |

問3：あなたは将来どのような形で働きたいですか。(一つを選択)

- 1 アルバイト、パートやフリーターで働きたい
- 2 できれば、派遣社員、契約社員など、より安定した仕事につきたい
- 3 正社員として働きたい
- 4 自分の腕に職をつけて、会社に依存しないで働きたい
- 5 家業を継ぎたい
- 6 ボランティアとして働きたい
- 7 働きたくない

問4：あなたは『フリーター』という生き方をどう思いますか。(一つを選択)

- 1 従来の効率優先とは違う新しい時代に適した働き方である
- 2 フリーターはしないほうがよい
- 3 自分がどうやって生きていけばよいか分かるまでの時期の働き方としては認めらるが、できるだけ早い時期に正社員に移行すべきである
- 4 わからない

問9：あなたは家族(主に親)に信頼されていると思いますか。(一つを選択)

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 すごく信頼されている | 2 まあまあ信頼されている |
| 3 あまり信頼されていない | 4 まったく信頼されていない |

問11：あなたには親と遊んだ記憶がありますか。(はい、いいえ)

- ② 上の①で「はい」と答えた人にお聞きます。いつ頃、何をして遊んだことを覚えていますか。

問16：あなたには今、信頼できる先生がいますか。(はい、いいえ)

- ② 上の①で「いる」と答えた人は、それはだれですか。

- | | | | |
|--------|--------|---------|-------|
| 1 学級担任 | 2 教科担任 | 3 クラブ顧問 | 4 その他 |
|--------|--------|---------|-------|

問19：あなたには仲の良い友人はいますか。(はい、いいえ)

問24：あなたは、今、困っていることを相談できる人がいますか。(はい、いいえ)

(やまもと けんじ 教育学研究科臨床心理学専攻博士後期課程)

(指導：東山 弘子 教授)

2007年10月11日受理

